

死刑廃止の可否

秋山哲治



一

国家が死刑制度を存置することの可否の問題は今なお人々の関心を求める課題である、といつてよい。すでにボン憲法一〇二条によつて死刑を廃止した西独においても死刑論議はなかなか活況を呈している。ハンス・ペーター・アルト氏は一九六〇年『死刑の問題』(Das Problem der Todesstrafe)と題する書を刊行し、その序文の冒頭において次のように述べている。「ベッカリヤの一七六七年の書『犯罪と刑罰』はすでに二百年間にわたる死刑への闘争をまき起したのであり、法律家・哲学者・神学者・医学者等々無数の者がこれに参加した。真摯かつ深遠な思索にもかかわらず死刑が正当であるか、ないしは、不当であるかの問題についての闘争は終つてい

ない。死刑は依然として一個の問題である。」死刑がドイツにおいてなお新しい論題であることは一九六二年公刊せられたDie Frage der Todesstrafeの中で著名な刑法学者としてわが国の学界でも知られているマウラッハ、シュミット、イエシュック、ボツケルマン等が執筆陣容の中に加わっていることからうかがえる次第である。

わが国においても、時あたかも改正刑法が準備せられ審議されつつあることに関連し、これを機として死刑の存廃が改めて考えられることになった。改正刑法準備草案第四七条は次のように規定する。「刑の種類及び分量は、法秩序の維持に必要な限度を越えてはならない。死刑の適用は、特に慎重でなければならない。」死刑はなお準備草案からはその醜体を消すことができなかった。刑法改正準備会の議長をつとめられた小野清一郎博士はこれについて次のように説明せられる。「死刑の存廃は刑法における一つの根本的な問題である。理想としてはその廃止が希望されるのであるが、現実的な文化の立場においては、にわかにこれを全廃することはできない。死刑廃止論が無条件に正しいとはいえない。準備草案は全体として死刑の規定を減少しているが、なおその存在を認めている。そこから、その適用において特に慎重であるべきことを規定したわけである。」(改正刑法準備草案)特に慎重であるべきように規定したことを格別(案理由書九五頁)に注意して欲しいと小野博士は強調せられるのであった。しかし、それでは日本の裁判は従来死刑の適用は慎重を欠いたのであるか、と問いたくなる。けれども死刑の存廃について審議会が慎重を欠いたわけではない。相当の論議を重ねられたことは以下の理由書の説

明でも推察することができる。「死刑の存廃については、死刑の廃止は世界的傾向であるから、これを廃止すべしとする意見もあったが、準備会の多数は将来国民の法的確信が死刑廃止に傾いた暁には死刑を廃止すべきことに異論はないが、現実的な立場で、かつ、現状をもととして考える限りにおいては、死刑はなお存続すべきものとせざるを得ないという意見であった。」(前掲理由書)これによると、準備会の多数は国民の法的確信と現実的な立場における現状を根拠として死刑の廃止を踏み切れなかった、ということである。

以上のような立法の現実を背景として、われわれはこの問題に關してのわが国学者の二、三の主張について注意しなければならぬ。竹田直平教授の「立法における死刑——立法上の死刑は廃止すべきでない——」(甲南法学(一)卷一号)の論策がその一つであり、青柳文雄教授の「死刑存置論」、宮沢浩一教授の「死刑廃止論の立場」(法学研究三)をそれに加える。

二

「日々の新聞紙上に兇悪無慚な殺人犯罪等の幾つかが報導されていない日は稀である。国政も、法律も、裁判も、このような犯人から人命を保全する任務を行なうについては、殆んど無力であるかと疑われるほどである。この現実に徹しても、最貴重の人命と人種の保全は、兇悪犯罪の発生を待つて初めて活動を開始する警察や、裁判や、刑の執行ではなく、正にすべての国民の心の深奥に、『わが命にかけて』他人の生命と人権とを尊重せねばならないという常住不斷の自警自戒の念慮を育成強化することによって、未然に犯罪

動機を抑制せしめることに期待をかけるべきである。この『わが命にかけて』という国民各自の理性と良心に出でた自警自戒を、立法に表現したものが『死刑』の制度である。以上は竹田直平教授の主張の骨格である。そこで教授には死刑の廃止は兇悪犯人を鼓舞し助勢するものと思われるのであり、「君は不法に人を殺しても君の生命は法律が保障する。」旨を予告することになる、と考えられるのである。

しかし、教授の立論にはいささか疑問の生ずるものがある。教授の立場にあつては死刑は殺人罪に対してのみ認められるものでなければならぬ。内乱罪其他の重犯に対する死刑の規定はどのように解せられることになるものであろうか。竹田教授の主張によれば、他人の生命を奪つた者は自己の生命を奪われることを約束する者である、ということであるから、この趣旨においては殺人犯人を他の個人が報復的に殺しても正当であることになる。ケネディを暗殺したオズワルトをルビーが殺したとしても国家は文句をいえないことになるのではなからうか。今一つ更に疑問となるものがある。「わが生命にかけて」という自警自戒はそれとして認められるとして、はたして自警自戒はそのままに「死刑」という法的表現であると解し得るであろうか。自己の自己に対する規範は座右の銘ではあつても法規範たり得ない。死刑が廃止せられたときも自警自戒はそのまま残らねばならない。「君が不法に人を殺したときは国家は社会秩序を維持する必要上君の生命を奪う」、これが「死刑」に表現せられる法的意味であるとしなければならぬ。教授にあつては死刑を存置する場合の法と死刑を廃止した場合の法の性格が別個のものとな

つてゐる。

青柳教授はわが国の国民性と社会事情を理由にして死刑存置の必要性を説かれる。教授の理解によれば、わが国民性は環境を征服して築き上げた欧米諸国の国民性とは異つたものであり、それは環境に順応するという態度、環境に逆わないという態度をもち、災害、戦争も自己の宿命として甘受するのであり、人命の喪失も一つの宿命として甘受する。西欧のように法秩序ばかりか倫理的な秩序、神の秩序に反しても敢えて行なうという兇悪犯人には死刑という刑罰は威嚇力をもたない、ということがあつても、わが国民のように環境からの影響が大きく深刻な罪の意識の下に犯罪を行なうものではないという事情においては、兇悪犯罪を行なおうとする者にとつて死刑は威嚇力をもつことが少なくないと考えられる。

青柳教授は死刑存置の理由として、さらに、社会事情をあげられる。すなわち「社会事情が混乱の中にありいつ兇悪犯罪が行なわれるか判らない場合には、その意味でも死刑は必要である。人口の都市集中、工場・交通の発達に伴う危害の増大と人命軽視の風潮は現代の特徴であつて、とうてい平安朝の時代に死刑を廃止した社会事情とはくらべることができない」このように主張せられるのである。

われわれは青柳教授の論説に対しては疑念を抱かざるを得ない。わが国民性がたやすく環境によつて支配され、犯罪の実行もまたそれに因るとすれば、死刑はむしろ犯行を阻止する力をもたないと考へるべきではないであらうか。また、もし、わが国民性は権力に対して盲従する傾向を有するから、国家が死刑を定めることにより、こ

れに服従せしめ得るのであり、従つて犯罪を阻止し得るのであると主張せられるのであるとすれば、それはわが国における犯罪の現実を余りにも無視することになるのではなからうか。

死刑の存廢はそのときの社会事情に依存する、というのが青柳教授の主張でもある。人口の都市集中、工場・交通の発達に伴う危害の増大と人命軽視の風潮が現代の特徴である、死刑を廢し得ない理由がここにあると強調せられるのである。しかし、人口の都市集中工場・交通の発達等は特に日本の現象ではなく欧米も同様である。しかも、このような国家にあつて死刑が廢止されているのはどのように説明せられるのであらうか。人命軽視の風潮を指摘されるのであるが、往時の日本と比較して現在の日本はむしろその風潮が少ないとならなければならないのではなからうか。

三

死刑存置の論陣に肉薄せられる者に宮沢浩一教授がある。「はたして、日本の現実が死刑を必要としているのか。現実の日本の死刑がいかにどのような作用をしているのか。正義に本当に奉仕しているのか。死刑が存在することによつて、なんらかの意味をもつということとは、法律家を含めて多くの日本人の陥っている錯覚なのではないか」死刑存置に効用を認めることは錯覚にすぎないと痛論せられる教授は、さらに、「国民の法的確信」とか、「正義」とかを手輕に振り廻す趣味のある人達に冷水を浴びせたいとも述べられるのである。しかし、過去數百年にわたつて多種多様に論議せられたもの、特別に新しい観点があるのでも特別のオリジナリティがあるのでは

ないと断られる。人間の持つてゐる忘却という都合のよい、そして、おそろしい属性に対し、かつて言われたことを繰り返すのであると謙遜せられつつ、社会契約説に依拠する議論、倫理及び宗教的見地からの論説、人道主義に基く見解、法学的根拠などを検討せられたのであった。限定せられた紙数の中に教授の精気ある行論を紹介することは到底できないが、その一、二を注目することにした。植松正教授は「人道論にもとづく死刑廃止論は、法の理念たる『正義』の価値に対し盲目な議論である」と非難されるのであるが、宮沢教授は「我々は血に飢えた正義を正義とは考えないと答えるよう。『天に代りて不義を討つ』という式の正義論は、正義の価値を冒瀆するものである。」と主張せられる。また、おなじく植松教授が死刑廃止論は感情論であるときめつけられるに対し、教授は死刑存置論もまた感情論であると反駁される。その例として、死刑を廃止している西独において、タクシー運転手に対する強盗殺人事件に抗議した死刑復活要求を挙げられ、これがいかに感情的なものであったかを示される。これらは、名は正義に求めつつ、実は殺害された者に対する怒りの感情が死刑を求めたものであると論じられる。死刑存置論者は、国民の法的確信とか国民感情とかにその根拠を求めることを通例とするのであるから、その者が、廃止論を感情論なりと軽視することはまさに奇妙であるといわなければならない。

四

死刑は私人の復讐ではない。国家の刑罰権の行使としてその可否

が考えられなければならない。そのような観点に立つ場合検討されるべきものは、刑罰権の中に国民の生命を奪う権利が認め得られるか、ということと、死刑は社会秩序の維持のために有用であるか、ということである。後の問題は、従来、威嚇力の有無の問題として多く論じられたものである。これは実証的な課題である。死刑を廃止した国に犯罪が増加するということはないとして威嚇力が否定せられる。わが国の少年法はその五一条において、十八才未満の者に對しては、死刑をもつて処断すべきときは、無期刑を科すことを規定し、この意味において死刑を廃止しているといつてよい。それでは、十八才未満の者が死刑を脱がれるという理由においてそのような犯罪が多くなされるかというのではなく、統計の示すところによれば廿才から廿五才にいたる者が死刑犯人の大部分を占めるのである。実は死刑のみならずおよそ刑罰自体が犯罪防止の力をさしてもつものではないことを知らなければならない。

国家は国民の一人一人をその例外なく生存を全うせしむべき義務を負う。如何なる無能者、不具者、狂人といえども人として尊重せられなければならない。いかなる不具者をも殺すことは、否、兇悪犯人すらもこれを殺すことは国家の禁止するところである。そうであるとするれば、国家自らも、自らの手によつて国民の生命を奪うことは許されないと考えるべきではなからうか。

(法学部長)

西南アジア旅行抄

住谷磐根



た。席のバンドをお締め下さい」とスチュワーデスにアナウンスされて、ハッとわれにかえりました。ぐんぐん高度が下って、夜の灯が点在するダムダム空港に着陸したのです。

秋風の朝発ち夕べ椰子の風

晩夏という感じの暑さの中を、迎えの車で場末らしい町並から、市の中心部へ向って走っています。スペイン、ポルトガル、オランダ風の建物が交々建ち並ぶ古風の街に、ターバン頭の印度人が雑踏し、内地のどこの都市にも見られない全く異質的な賑やかさ、人口印度第一とは聞いていましたが、よくもこんなに人間がいたものか、名状し難い一種の匂い、これがカルカタであるかなと驚きながら豪勢なホテルの玄関に着きました。

ターバンのボーイ扇風機は高し

ボーイに渡すトランク夏衣にて満でり滞在中の一夜、ロタリークラブに類する会議が、このグレート・エステランホテルのサロンに開かれて、映画等でみかける国際色豊かな貴顕紳士、淑女？ が集まって会食の後、絢爛たる濃色のサリーをまとった印度の美女たち十人余りが輪になって、印度の踊りが妙なる奏楽に合わせて、くりひろげられ

生涯の旅なりと踏む初霜を

羽田空港をたつBOACジェット機は、古美術探勝という目的を同じくするわれら六人の画家をも含めて、印度カルカタへ直行する旅客機でありました。

十一月中旬の羽田空港は、太平洋から吹きつける冷たい風でありましたが、ロビーで夏服に着替えて見送りのものに渡し、惜別という感情も無く、希望を乗せて喊声を後に、一路南の空へ向って飛びたちました。

防寒具用なし行手万里の旅

団雲を突いて高度を上げ、さてこれからは読書も睡眠も自由と機席に落ちつきました。

雲海を越えて見送る初雪富士

古くから日本と印度との関係のさまざまを改めて考えたり、上野国立博物館で見ってきた印度古代美術展を思い浮かべ、スチュワーデスの運んできた機席での食事をちよつと楽しんで、ゆつくりとりました。

高度定り画心はすでに南草の空

落日を追いかけるように西へ西へと飛び、いよいよ落日最後の余光が雲間に没する行く手に、左右無限大のオーロラのような光の線を描いて燦然と輝き、その下部の壮大な空間が、紫灰色の深い層をなし、この世のものは思われぬ壮麗な幻感に心を奪われて見入っている時、

「皆様、カルカタの上空にさしかかりまし

ました。

ライトを浴びて緩急ひるがえすサーリーの美しさに恍惚として見とれました。

舞姫の絢爛夏夜にひるがへす

スケジュール以外の収穫とばかりにパチリパチリと、さまざまの角度からスライド・カメラに写し撮ることができました。

ベットに戻り暑く舞曲が眼に残る

カルカッタのインデアン歴史博物館は、豊富な資料では印度随一と聞いていました。

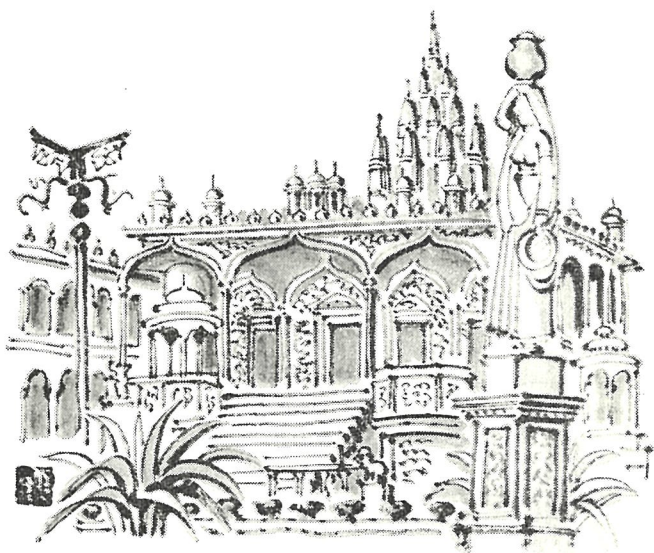
ジャナ教、ヒンズー教、仏教の彫刻の素朴にして情熱的姿態の裸像、躍動的曲線美、民族的着想、石の国印度はもっぱら石像彫刻であつて、木彫はほとんど見られない。暑い国のことで仏教彫刻は裸像のごとく見える薄い法衣をまとっている。西紀前二世紀半頃に作られたというパールハットの欄楯の大きな彫刻にも異様な感激であつた。絢爛として豪勢な織物も、ぼう大な数、見事な工芸品の数々も感激しました。この博物館の見学だけでも、はるばるの印度まできた甲斐があると思ひました。中庭に面した廻廊には彫刻や建造物に使われた数々の石材と、加工すれば宝石として翫賞される原石が陳列してありました。

なまめける姿態千古の石なりけり

カルカッタの印象、それは庶民生活の匂いのしみこんだ古風の町と、マイダンと呼ばれる広大な広場と整然とした立派な道路と、近代建築英式威儀ばった新しい町とが並存している。壮大なエデンガーデン、ヴィクトリア記念堂の辺りがそれで、官庁、文化施設もその周辺にある。宝石づくめのカーリーテンブル(寺院のある市の南端の場末には、ヒンズー的で印度の伝統的と見える極めて古風がただよっている所がある。カーリーテンブルはそのきたならしいごみごみしたなかに、眼も醒める燦然とした極彩色のデコレーションケ



ベナレス・ガンジス河畔の沐浴



カルカッタ郊外カーリーテンブル

かくも豪華狂信の徒を灼きつづける

カルカッタを後にして、空路をガンデス河畔に沿うてベナレスに向いました。

クロスワード模様に見える耕地整理された農村風景も、北に進むに従って、樹木も人家も極めてまばら、荒涼とした大地が幾時間も続く。

雲流れガンデス河畔機影投ぐ

ベナレスのクラークスホテルは菩提樹の林の中に白亜の廻廊を持った別荘のような瀟洒な建物、青芝に花壇、広い庭にビーチパラソルも点在し、印度模様の家具調度も印象的でした。

蔓バラは万葉白亜の異郷の宿

蛇使いが二人チャルメラのような笛を鳴らし、観光客の気を引いていますが目もくれない。

蛇使いカメラの対照としてありぬ

ガンジス河畔ベナレスのヒンズー沐浴場に向いました。北印度的古風の淋しい町並を抜けて河畔にいたれば、五層六層の赤い煉瓦の建物が建ち並び、城砦風な屋根、ヒンズー的積み重ねの簷えた尖塔を頂くもの、ドーム風の頭を持ち、円形の廻廊を持った建物が密着して並び、水辺にいたって没する広い階段が続き、河の中、階段、広場といわず群衆で賑わい、ビーチパラソル風の網傘が所かまわず立てられて、赤、白、黄、青の衣の人、人、人。流れに浸って合掌するもの、両手に抱んで頭や肩にかけるもの、三三五五とたむろして呪文を唱えるもの、水を壺に汲んでいるもの、煉瓦でできた更衣所に入出し、全印度の信者が集まった祭のような賑やかさ。私たちはモーターボートに乗って中流を三千メートルくらい往復し、建ちならぶ建物と河縁りの沐浴を写生し、カメラに納めました。

濁水も聖なり陽灼けの肌浸す

陸に上って建物と建物の間の狭い通路を巡って見物した。遥かに見えた河畔の建物までが通じ合って、凹凸迷い道のごとくで人と牛のごったがえしで、牛が通れば人は壁にびったり身を寄せて牛を通す。聖なる牛といわれ

ーキを絢爛のゴブラン織の上に置いたような建物で、柱も、廻廊も、階段も、屋根裏も、尖塔もちりばめた七色の宝石の輝きであって、ヒンズー寺院としてはもっとも華麗の寺といわれている。

る白いコブ牛は、悠々として人混みの狭い通路を通る。暗い高い壁・石畳の濡れた通路に、大かたは老人男女がよごれて白あせたサリーをまとい。呪文を唱えながら、壁にくり抜いて刻まれてあるヒンズー神像に花を供え、建物の階上のどの部屋も、信者が密集している。驚歎の外はない状態です。

扇子手に異国語かたる群に伍す

ベナレス郊外六キロ位の地に、釈尊が悟りを開いて下山し、はじめて五人の比丘に説法せられたところと伝えられるサルナート遺跡ストウーバがある。鹿野苑（ムリガダーヴァ）として名高いところで、広大な芝生花壇の院庭、でっかい坊頭山の石の塔、かつては仏教のメッカとして賑わった寺院の跡は、礎石と石材が広い範囲にみられた。

仏蹟を見巡りて印度の旅なかば

コカコーラかくひろまれり熱砂に吞む
孔雀うちわ旅程南へ未だ幾日

さて、ベナレスからアラハバードへ印度国内機で三時間余り、この街も大樹の繁った広い道路の古風の町、四叉路の中央ロータリーの芝生を広く持ったチャペルのそびえる塔を見上げながら、車で近くのバーネツホテル

に着く。アラハバードでも見学の場所は多くありましたが、それは略して、ヒンズー教の聖地としての大遺跡カジュラホーへ向いまして。

曉雲を突いて、北印度貫通路を無制限速力で七時間に余るドライブです。官庁、住宅街を発つて、商店、バザール、庶民の街をへて場末を抜ければ荒涼とした平野が、地平線の彼方までつづき、広く日蔭をつくった大樹の並木が直線の果に一点のように空に見える。人家も極めて僅少で人かげさえ見えない、文化を遠く倦びしさに背筋が寒くなるほどであります。

樹齡問わず亭々遙かまで炎暑

一時間余り車中でうたたねで、目が醒めても、行く手も左右も風景が変わったように思われない。宿場のような村落を通過したけれど、若者の姿はほとんどみられない。老人や子供が珍らしそうに集ってきます。白壁や煉瓦をめぐらし、柱を残したドーム形の廻廊に近づけば、牛と人間と雑居で、壁の中は瓦礫と草山、旧豪族、地主の廃墟、幾百年の昔から土着の哀れな農民の住居となっているのでしょう。人口の都市集中で、若者は都会へ

出稼ぎなのです。

北印度熱砂渺茫たる旅路

牛の群が三、四十頭道いっぱいにくるのに時々出会います。一人の老人が追う遊牧の生活の道中です。道路の草が、手入れの行き届いた芝生のように見られるのは、これら牛や山羊の群れの往来で喰べ続けられるためだとわかりました。後日デカン高原へドライブしたときも同じように青草が繁りがいいのです。印度の人々の幾倍かの牛、街の中の人ごみに悠々と牛が歩いている程ですから。

牛の群れ印度の大地青草尽く

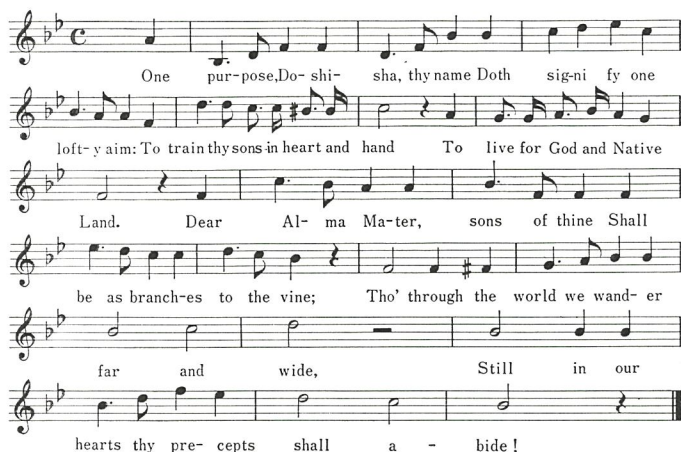
カジュラホーは燦く地平線の白雲の下だと運転手に聞かされて、印度大陸の広さを徹底的に味っているわけです。

絵でみるメキシコか、西部劇に現われる平原にも似た風景の中を走って、日暮れ近くに漸くカジュラホーの街に車を乗り入れました。明日からはいよいよ今度の旅のピークともいえるカジュラホーの大遺跡の探勝となります。

常夏とは覚えてカーデガンまとう

(画家)

DOSHISHA COLLEGE SONG



同志社ソング

わが同志社も、いまや、学生々徒数は二万数千、教職員は千名におよぶ大家族となった。校地は今出川・新町・岩倉・香里などに分散し、組織も経済もそれぞれ独立し、おのおの独自の発展の道を進みつつあるように見える今日、この教職員・学生生徒が共有しているものは何か？と考えるとき、いうまでもなく校祖新島先生の御理想と、その根底をなすキリスト教精神であり、その象徴として三つ葉の徽章、そして校歌を挙げるべきであろう。入学式、卒業式、創立記念式などの学園の主要行事に、この旗の下に、一同が同志社カレッジソングを一心になって歌うとき、はじめて同幹連校の感慨を深くするのである。このこと

はリユニオンやEVE音楽会で先輩と後輩、校友・同窓・現役の別なく、「われらは同志社マンだ」との連帯意識を深めることに非常に役立つようである。

このカレッジソングを作詞した一柳米来留（ウィリアム・メレル・ボーリズ）氏は惜しくも今年の五月七日、近江八幡市の自宅で八十三歳の天寿を全うし昇天されたが、彼はこの校歌とともに永久に同志社に生き続けるだろう。

このカレッジソングは四節からなっていて、一般に二節までに省略して歌われていたが、戦後、彼の要望により一節および四節を歌うのが普通になった。曲は旧帝政ドイツ国歌で、カール・ウィルヘルムの作曲であり、変ロ調に下げて斉唱されるが、合唱の際はハ調によることもある。

歌詞の内容は女子大助教授児玉実英氏を煩わして、つぎのような訳詩をいただいたの

野村芳雄

で味わっていただきたい。

同志社 校歌

(一)同志社よ、その名は一つの目的を意味するすなわち、その学徒の精神的、肉体的に神のため、祖国のため

生きんという一つの崇高なる目的を。親愛なる母校よ。同志社の学徒はぶどうの枝のごとくであるであらう。たとえ世界くまなく、広くはるかにわれらさまようとも 汝の教訓はわれわれの心に、

とわに生き続けるであらう。

(二)われわれが同志社にきたのは、

心のより広きかてを 求めてである。

われわれは 真の目的の価値を

新たなる意味において

学ばんとして ここにとどまった。

親愛なる母校よ。われわれのつとめは

かたき心をもって

未来に処することである。

なぜなら同志社は、

神のため、同志社のため、また祖国のために

役だてよと 高き目的をもって

われわれに教えてきたからである。

(三)戦雲がその険悪な動向を示すとき、

いく万の愛国者は

武器をもってはせ参する。

しかしわれわれは
久しきにわたる平和の年月のうちに
祖国の名と名声を
いやましにまじたいと思う。

同志社校歌



親愛なる母校よ。その学徒はその生涯をいつまでも神への信頼に捧げるであらう。確固不動の目的をもってわれわれはたえず神のため、同志社のため、

また祖国のために

立たんとするものである。

(四)われわれが生まれた国よりも、

さらに広い世界といえども

それは 一つであることを

われわれは学んだ。

自己愛よりもいや高き人類愛と

奉仕の精神を われわれは会得

する。

親愛なる母校よ。その学徒は

聖なる生涯を送らんがため

励もうとしている。

重ねゆく年とともに

神のため、同志社のため、同胞

のため

かえりみてくいなからんがために。

さてこのカレッヂソングは英文であるため、中学生には難解であることと、戦時中の特殊な配慮もあって、日本語の校歌の要望が高まった。そこで湯浅半月氏の格調高い「天地は神の創作と記せる聖書の第一句……」の歌詞に校友の作曲家大中寅二氏が、雄大にして荘重な曲を付し、戦時中は、もっぱら、この邦語校歌を歌い、戦後は英語のカレッヂソングと並び愛唱されるようになった。

このほか、大学には北原白秋作詞、山田耕筰作曲の

大学歌

蒼空に近く 神を思う瞳
挙れり同志社一の精神
伝えよわが鐘ひびけ高く
榮光新に 梢とそよがん
樹えよ人を 輝け自由
われら、われら 地に生きん

のへ調子の名曲がある。作者はこれを作るた

地の北洛学歌 中 援 応

ら く ぼ く の ち に か ぜ た ち て
お お し き し し は - お き い で
く ろ く も ま き て ふ る い た つ
同 志 社 け ん 児 の 意 気 見 ず や

めに親しく同志社を訪れ、神学館の塔上に佇み、静かに彰栄の鐘に耳を傾け、数日間その想を練ったのだと伝え聞いている。この大学歌もできてから二十数年になると思うが、あ

まり多くは歌われないのはいかにも残念で仕方がない。そのわけは曲の途中に転調がありリズムにも変化が多く、一般にはやや取付き難いためかと思われるが、現代の流行歌にもこの程度の転調やリズムの変化は取入れられているので、おいおい愛唱されるような予感がある。

つぎに同志社の卒業式に必ず歌われる三輪源造先生の作

春の調べの鶯よ

花の夢路を とくなかれ

天つ日の 影に向いて

大空高く 行くわれぞ

露の色香に あくがれじ

神の召し給う み声ぞびびく

が思い浮ぶ。「仰げば尊しわが師の恩」や「螢の光、窓の雪」が、師の恩を押しつけたり出世主義の片鱗を示すので、とかく一般に改善を望まれている中であって、昔から同志社らしい、ほのぼのとした巣立ち行く若者の理想や神の召命を歌いあげたこの送別の歌はまことに素晴らしい名曲であり、同志社ならではの

卒業式ムードを盛り上げるに最適のものであろう。

このほかに女子中高には同志社「花の歌」上野イト先生作詞、野村芳雄作曲（昭和二十

三年）

不 断 の 楽



来 ら ば 来 れ



校旗の色の
妙にゆかしき

花と笑み
こむらさき

心ひそめて つつましく 神のみこえ を 聞きわくる すみれと咲 かん 同志 社おとめ が準校歌として 毎年四月二十一日の女子部創立記念日に全校斉唱されている。 また、校友森中章光氏作詞「同志社の歌」われらの母校」に私が作曲し、六年前にできた

祖国を思う 真の人 神に ささげし

まことの 祈り これぞ 学園の礎石

ほこれ 栄光の 歴史

われらの母校 われらの母校

よよに輝く その名同志社

がある。校友会例会や記念式典などで歌われれば有難いのだが……。

中学の学生歌

前窪勝之助作詞

緑滴る千年の 老松操変らず

正しく 強く伸びて行く

寺畔の仔竹 生命 満つ

立てよいざ立て高らかに

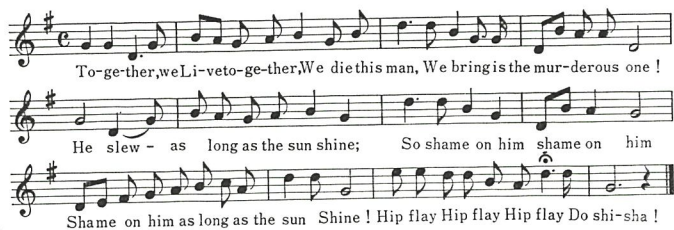
彰栄の鐘 響くなり

立てよいざ立て若人の

血潮は 胸に 躍るなり

これは昭和六年頃、中堀愛作先生の作曲で同志社中学の準校歌として歌われていたが、両先生とも、あまり派手にPRされないせいか、現在あまり歌われないのが残念である。今も楽譜が中学校で大切に保管されてあ

Doshisha Rugby Song



とだろう。しかし楽譜に残らない名曲の数々は時代とともに学園から消え去り、現在のつぎの数曲に過ぎない。

ると良い
が……。

つぎに

応援歌と

寮歌であ

るが、歴

代の応援

団長諸君

のリュニ

オンでも

開いて、

各時代の

応援歌を

披露して

いたたい

たら、き

つと素晴

しい曲が

無数にで

てくるこ

不断の楽

荒木隆作詞

一、不断の楽は碧玉の

生れる加茂のさざれ波

源遠く澎湃と

うねりの山の精清し

二、夕焼燃ゆる愛宕山

嵯峨野二十里露しげく

原蒼茫と暮れ行けば

虫の音うたた身にぞしむ

来らば 来れ

一、来らば来れ わが敵よ

洛北の地に健児あり

骨鳴り 血湧き肉躍る

勝算すでにわれにあり

洛北の地

一、洛北の地に風立ちて

雄々しき獅子は起き出でぬ

黒雲捲きて振り立つ

同志社健児の意気見ずや

二、固き敵陣何がある

同志社健児の肉弾は

破竹のごとく進み行き

見よや見事に破るなり

若草萌えて

一、若草萌えて 生命はあふる

若人の血 今もゆる

希望は胸に 心は躍る

男らしく立て 同志社

高らかに叫べ 誇りの歴史

いざ起て友よ 勝利は待てり

白熱の意気 敵なし

同志社ラグビー・ソング一、二は合宿の際や試合前などに選手にも、応援団員にもよく歌われ、親しまれてきた。そして団結を固め黄金時代を築いてきたものだ。ラグビー黄金時代はこの歌とともにあったといっても過言ではない。負傷して場外に抱きかかえて連去られた選手も、取り囲んでこの歌を歌われるとむっくり起上って再び戦列に加わって行く感激の場面を何回か見たことを覚えている。

× × ×

同志社人は同志社ソングを忘れてはならない。これらは同志社を一つに結び合せる心の掬である。
(女子中・高教諭、音楽)

伸びゆく同志社



具 島 兼 三 郎

同志社のことはいまもなつかしい。何かの
用事で京都に行くと、どうしても今出川のあ
たりを一度あるかずにはおられない。ときど
きに電車の窓越しに眺めることもある。とこ
ろが眺めるたびに同志社は変っている。今出
川どおりと鳥丸どおりの交差点の東北側の角
に同志社の発展を阻むかのごとく寺院風の建
物が一棟残っていて、わたしの在任時代から

ちよつと目ざわりになつていたが、それがい
つの間にか、同志社のものになつてゐる。洪
水が橋桁を押し流すような勢で、同志社が発
展していることを感じて愉快であつた。今出
川のキャンパスのなかに新しい建物がたつて
ゐる。次に行つてみると、またそれとちがつ
た別の新しい建物がたつてゐる。オヤオヤと
思つてゐるうちに、いつの間にかそれがグラ
ウンドの方までびて、おしまいはとう
とうグラウンドそのものが姿を消してしまつ

た。きくところによると、同志社にはわたし
らがいた時代とちがつて、あらたに工学部が
でき、経済学部や商学部ができたやうである。
その上に大学院である。これだけのものを今
出川のキャンパスに新設しようとすれば、グ
ラウンドがなくなつても不思議はない。キャ
ンパスのなかには、大変な学生たちである。休
み時間などキャンパスのなかから溢れだし
て、御所の方まで流れこんでゐる。

しかし、變つたのは今出川のキャンパスだ
けではない。わたしは、同志社在任時代、下
鴨に住んでいたのも、暇をみてよく松ヶ崎か
ら宝ヶ池のあたりを散歩した。いつだつた
か、日本学術会議の用事で京都に出かけたと
き、急に宝ヶ池のあたりが恋しくなつて、三
十年ぶりにそこを訪れてみておどろいた。わ
たしが下鴨に住んでいたころの宝ヶ池は、風
光明媚の地ではあつたが、訪れる人も少く、
草ぼうぼうで、道のあるくの人に人の背よりも
高く生い茂つた草をかきわけて、進まねばな
らなかつたことを覚えてゐる。それが今度行
つてみたら、どうだろう。そこには立派な観
光施設ができていて、むかし草ぼうぼうだつ
た道路はきれいに手入れされて、自動車が行

っているではないか。それにおどろいたことに、岩倉よりの方向には国際会議場ができるとかで、池の一部を埋め、山をこわして、地ならしがしてある。山をこわしたので眺望がよくなり、遠く岩倉の辺までみえる。ジツと目をこらしてみていると、何か学校みたいな建物があるので、同行してくれた同志社の卒業生S君に「あれは何か?」ときいたら「同志社です」という。在任時代わたしも一時臨時講師で出かけたことのある旧同志社高商である。いまはどういうことになっているのか、そのとききながらも忘れてしまったが、ともかく同志社が宝ヶ池からみえるようになったわけである。しかも、国際会議場に近い景勝の地をしめているとあっては、将来同志社を訪れる外国のお客さんも自然ふえるであろうし、同志社の国際的声望はいよいよ高まるであろう。

きくところによると、同志社の分校はまだこのほかに京阪の沿線にもあるそうである。三十年間の同志社の発展には、ただただ目を見はるばかりである。

いつだったか、例によって今出川附近を歩いたとき、同志社から御所の辺にかけてたく

さんの車がならんでいるのが目についた。パレードでもあるのかと思って、同志社のある先生に、「今日は何かあるのですか?」ときいたら「あれは学生たちが通学のために乗ってくる車ですよ」と聞かされて「ウーム」と思わず唸ってしまった。田舎で生活しているわたしにとっては、日本の学生たちの生活がそれほどアメリカの学生たちのそれに近づいていふなどということは、思ひもよらない大発見だったからである。九州あたりではさいきん先生たちのなかにポツポツ自家用車で登学する人たちが出てきた程度で、学生の自家用車通学など、まだみることがない。さすがは大阪を背景にしているだけあって、学生でも同志社の学生ともなればちがったものだったと思った。

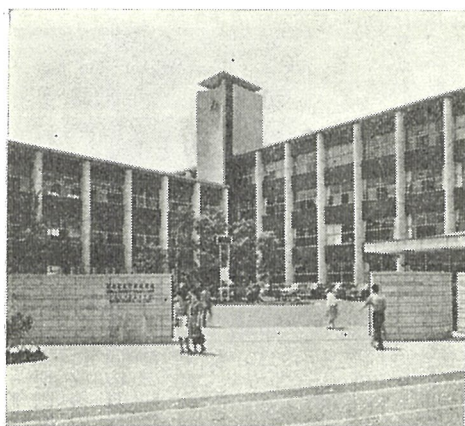
しかし、いくら時代の尖端を行く同志社でも、もう一段車がふえると、パークする場所がなくて、どうにもならなくなるであろう。アメリカでも駐車場の問題は大変な問題になっているようで、ミシガン大学など、とうとう学生の自動車通学を禁止したとのことである。ミシガン大学の校庭にたくさんの自転車がおいであつたので、あれはどうしたのかと

きいたら、学生達が自動車を禁止されたので、自転車を使うようになったためたのとであつた。自転車なら自動車ほど場所をとらないから、パークするにも困らないわけである。今出川の附近では空地がないから、立体的な駐車場でもつくらない限り、同志社にもやがてそのような「文明の逆転」に救いをもとめねばならぬときがくるかもしれない。

二

同志社はたしかに発展した。しかし、発展したのは、ただ物質面においてだけであろうか? そうではない。精神面においても発展した。そのなよりの証拠が住谷さんを総長にえらんだことである。住谷総長の出現までにはちよつとした波乱のあつたこともしつてゐる。しかし、それは同志社自身の力によって克服された。さすがは同志社だと思った。

わたしの在任時代は満州事変から支那事変にいたる時代で、同志社にとっては苦しい試練の時代であつた。ファシズムの黒い手が同志社の喉首をしめつけていた時代であつたら、学内にはいろいろなトラブルがおこつた。有名な神棚事件がおこつたのも、このこ



ろである。キリスト教の学園に神棚がないのは当然のことであるにもかかわらず、それが無いのは怪しからんといって、当時同志社に配属されていた将校がさわぎだしたのである。今ごろそんなことでもいおうものなら、奴さんとうとう頭にきたらしいと誰も相手にしないにきまつているのであるが、そのころはそうではなかった。そんな無理なことをいっても、それが通った時代であった。配属将校の背後には軍部や右翼の勢力が控えていて、同志社の出方いかんでは、こんな学園の

一つや二つ押しつぶしてもかまわないと意気まいていた時代であったからである。それだけに同志社としても、その自由を守ることには、容易ではなかった。多少ともリベラルな人々は、次々に攻撃の槍玉にあげられたからである。そんなとき多くの人は後難をおそれて、誰も救援に馳せ向かうとはしない。攻撃の矢面に立たされた人が一人去り、二人去って、同志社にも秋風索漠といった感があつた。住谷さんもファシズムの集中砲火を浴びた一人であつた。些細なことがもとで、住谷さんが同志社を追われたのも、そのためであつた。同志社を去られたのちの住谷さんの運命が受難の連続であつたことは、わたしがよく知っている。

その後、わたしも住谷さんのあとを追うて同志社を去ることになったが、わたしはいまでも悪夢のように、重圧に押しひしがれて歯をいしばつていた当時の同志社の苦難の姿を憶いおこすことができる。クリスチャンでも神社に参拝すべきだというような理不尽なことが平気で要求され、学内の一部にも、それによって嵐が頭の上をすぎ去るならば、その要求に応じてもよいというような俗論が台頭

したなかで、あくまでも同志社の立学の精神を守り抜こうとして、苦斗された湯浅総長の悲壮な姿が、いまでも、わたしの胸の底に残っている。

しかし、同志社はいかにあの暗黒の時代を生き抜いた。それは激しい戦いであつた。そして、いまだ同志社の上にふたたび春のひざしがさんさんとして降りそそいでいる。それは激しい戦いを戦い抜いた勇士の姿をおもわせる。同志社はこの戦いを戦い抜くことによって、ふたたび自由を回復したのである。

そして新しい時代を象徴するかのごとく、かつてファシズムに迫害され、学園を追われた人を、新に総長として迎え入れた。それによって、同志社はいかなる力をもつてしても押しひしぐことのできない自由の精神を世界に示したわけである。

新島先生の遺言のなかに「同志社は隆なるに従ひ、機械的に流るるの恐れあり、切に之を戒慎す可き事」という一箇条があるそうであるが、同志社の最近の発展をみるにつけても、切に望まざるのは、その物質面の発展を精神面の発展によって裏づけてほしいということである。

(校友・九州大学教授)